

せ、自らは庄官として、実質的に庄園を掌握していた。しかし、地頭職は何かの事情で安楽寺へ与えられたのである。南北朝時代には、窪郷も窪庄も本主や名主たちが押領して、安楽寺へ年貢・所当を納めないとあるから、庄園は名称のみとなっているのである。応永九年（一四〇二）には、佐田親景が久保庄政所職を所望して、大友親著に取り次ぎを頼み、その返事を得ている。このころ、佐田親景は穉田・伊方兩庄と元永村を九州探題渋川満頼に安堵されており、穉田庄との関連が推測される。天文十二年（一五四三）の『惠良盛綱護状』に「京都郡くほの庄之内ひゑ田八町七反四十五代、此之内千代丸分」とあり、窪郷穉田が、室町時代には穉田庄と称されたり、戦国時代には久保庄と汎称されたようである。永禄三年（一五六〇）ごろ、国東の田原親宏は「京都郡之内、吉国村鍛冶屋名四町貳反四十代地」を片山市之佐方へ与えたが、久保庄内だから荒木出羽守方へ与えるので、代地として吉田庄の内を与える（『片山文書』）とあり、吉国までが久保庄に入っている。

京都 庄

宇佐下宮（御炊殿）は、破壊に及ぶごとに、国役として、造替してきたが、国衙が四〇余年造営を怠ったので、豊前国中の常見名田（多くは散在する墾田）を不輸租の神領とし、下宮一院造替に充てることにした。安元元年（一一七五）に、後白河上皇の認可が下り、郡名を冠する庄園が成立した。規矩庄・田河庄・京都庄・築城庄・上毛庄・下毛庄・宇佐庄がそれであるが、仲津庄は存在しなかった。なぜかわからない。

それから一〇〇年後の弘安元年（一二七八）、御炊殿が朽破するにいたったので、これらの庄の名主たちに催促したけれど、応じないので、本家近衛関白家より改めて下知をもって、不輸・別納・定田・免田の別

なく平均に催促している。これより前の嘉禄二年（一二二六）、京都庄稲光名を宇佐権大宮司公政は、舎兄公隆（大宮司）が高階氏の代官と称して押領したと訴訟を起こしている。高階氏は稲光五〇町の名地頭の娘で、公隆の妻となっていたのであろうか（『判津』）。

仁治二年（一二四一）の『宇佐神領散田帳』（『判津文』）によると「京都庄十五名」とあり、一五の名田をもって構成していたらしい。

貞和二年（一三四六）には宇佐権大宮司祝宮義と神主今永越後守宮居の兩人が、京都郡稲光名の定米を錢五〇貫文で売却している。このころには京都庄の呼称がなくなっていることが判明する。

第二節 室町時代

一 建武政権の成立と少弐頼尚

菊池武時の挙兵

後醍醐天皇が再度の挙兵計画を側近の吉田定房に密告されて、京都を脱出し笠置山に植籠り、ついで、隠岐島へ配流された元弘二年（一三三二）の秋、大塔宮護良親王・楠木正成が河内金剛山・赤坂城に再び兵を挙げると、播磨国の赤松則村をはじめとして、近畿・中国地方で、天皇方として挙兵する武士が相次いだ。金剛山・千早城包囲の鎌倉幕府軍に参加しようと、船で備後国鞆の津（広島県福山市）まで進んだ肥後の阿蘇大宮司や菊池氏は情勢が急変しつつあることを知って引き返した。元弘三年二月七日付で、金剛山の護良親王より、北条英時・桜田師頼以下の追討を命ずる令旨が、原田

氏をはじめとする九州の武士のもとに届けられた。

隠岐島を脱出し、伯耆国船上山に籠城をつづけていた天皇より、錦旗を頂戴した菊池氏は、大友・少弐氏を説得して鎮西探題北条英時を攻める密約をなした。正慶二年（一三三三）三月、これを察知した探題英時は、御家人の非常召集をかけた。僧良寛の『博多日記』によると、菊池二郎武時は、三月十二日、博多の探題館に出仕したところ、遅参だから、著到名簿に載せないと言われ、口論となった。翌十三日、天皇から拳兵を促す宣旨を所持する使者が少弐貞経のもとへ来た。貞経は、この使節二人を切り、その首を探題館へ届けて、探題への忠誠を示した。大友貞宗のもとへ来た使者は、貞宗が拳兵を断つたので、逐電したという。しかし、どこかに捕らわれていたらしく、数日後に殺され、首が探題館へ差し出された。菊池武時勢は錦旗を捧げて姪浜の探題館へ押し寄せた。探題方とはげしい戦闘が始まり、やがて菊池武時と子息の三郎頼隆以下七〇余人が戦死した。嫡子の二郎武重や阿蘇大宮司はひそかに帰国した。

合戦が終わったあと、少弐・大友等の武士が駆けつけ、残党が各地で退治され、二〇〇余の首が届けられた。豊前の守護糸田貞義も遅れて到着した。一日遅れて肥後の守護規矩高政も到着し、ただちに肥後国菊池城へ討手として派遣された。少弐・大友両氏は博多に留められた。

三月十四日には肥前国彼杵郡に配流されていた天皇の長子尊良親王を奉じて、江串三郎入道一族が拳兵した。同二十四日には、山陰より高津入道道性が責め下り、長門国に迫るといふ情報があり、四月一日、長門国の厚東・由利・伊佐氏が高津道性に呼応して、長門探題を襲撃した。

六日には長門国の武士の多くが天皇方となったため、鎮西探題英時は

豊前国の宇佐・下毛・上毛・築城四郡の武士を長門へ送って合戦を繰り返した。このように中国地方で天皇方が優勢になりつつあるとき、京都では、赤松入道らが京都突入を繰り返しては撃退されていた。

尊氏の拳兵

鎌倉では六波羅応援のため、名越高家と足利高氏（のち尊氏）を大将として大軍を出発させ、四月十六日には、高氏が入京した。高氏はこれより前、ひそかに伯耆船上山へ使いを送って、天皇に味方する旨を申し入れ、四月二十九日、丹波篠村八幡に願文を捧げ、天皇方としての態度を鮮明にし、同日、島津貞久・大友貞宗・阿蘇惟時等の九州の武士へ密書を発し、味方に誘った。

大友氏は、これより前、高氏と連絡し合っていたらしく、

伯耆国より勅命を蒙り候の間、参じせしめ候のところ、遮りて御同心の由、承り候の条、悦をなし候、その子細、御使に申し候ひおわんぬ、恐々謹言

（元弘三年）

四月廿九日

大友近江入道殿

高氏（花押）
（原漢文）

と、高氏が誘うより前に、味方する旨を申し入れていた。

高氏の寝返りによって、五月七日、六波羅探題は陥落した。これを知った関東でも、鎌倉幕府を見限る武士が続出し、五月二十一日には、新田義貞等が鎌倉に突入して、北条氏一族を自刃させた。その四日後の五月二十五日、六波羅滅亡の急報に驚いた少弐貞経は、急遽、大友貞宗を誘って探題館を攻撃し、北条英時以下一族郎等三四〇人を滅ぼした。

鎮西探題の滅亡

『歴代鎮西要略』には、この時、少弐・大友両氏が相談して、ひそかに島津・草野・紀井等の諸氏に廻文を発し、味方に誘うことにしたが、探題英時がこれを知り、長岡六郎という者を太宰府の少弐館に送り、様子を探らせた。これを新少弐

頼尚よりのみさが見つけて殺し、原田・秋月・三原等、筑前・肥前の兵一万をもつて探題城に押し寄せ、大友貞宗は戸次・田原・紀井・長野等、豊後・豊前の兵五〇〇〇をもつて攻撃した。この時、松浦党・草野・山鹿・宗像等が探題に味方して戦ったとある。

しかし、『北肥戦誌』は、少弐方に龍造寺・高木・安富寺、肥前・筑後の御家人が馳せ加わり、大友方には、豊後国の武士が同心して姪浜城の探題を攻めようとした。探題は家子長岡六郎を少弐館に遣わしたところ、少弐妙恵の長男武藤左衛門尉顕経と出合い、これに切りつけて重傷を負わせたが、自身もその場で討ち取られた。また、宗像・原田・三原・秋月の諸氏が探題方に加わって戦ったと記し、若干の相違がみられる。

城井高房の 当時の史料(『田口文書』)では、

博多出陣

五月廿五日、武蔵修理亮英時誅伐の時、舎弟重貞、疵を被る間の事、見候ひおわんぬ、よつて執達件の如し

元弘三年五月廿八日

田口孫三郎殿

(原漢文)

(宇都宮)

高房(花押)



宇都宮高房(冬綱・守綱)の花押

と、下毛郡田口(三光村)の御家人田口氏は、宇都宮高房(のち冬綱・守綱を称す)から、まず証判をもらい、七月八日・十日に、少弐貞経・大友貞宗へ軍忠の取り次ぎを依頼している。これより推量すると、豊前の武士は宇都宮氏に率いられて博多の戦鬪に参加したらしい。戦後は、鎮西両奉行が著到状を発し、新政府の仕事処理した。六月十三日付で、足利高氏から「召人・降人等の事を計沙汰せよ」という命令を両人が受けて

いたからである。

肥前彼杵に挙兵した尊良親王は、探題英時が自殺した翌五月二十六日に太宰府原山に着陣し、馳せ参じた武士に著到状を発しはじめた。

六波羅探題が減んだ知らせを受けた船上山の後醍醐天皇は鎌倉陥落の報のない五月二十三日、京都へ向かって出発し、六月五日、京都に入り、新政を開始した。

新政府は間もなく恩賞方・記録所・雑訴決断所等の役所を設け、山積する問題の処理に取り組んだ。雑訴決断所の職員一〇七人の中に、一番五畿内担当者、宇都宮兵部少輔公綱がいた。公綱は関東宗家の人で早くから高氏と行動を共にしていたと思われる。なお、城井高房は貞綱の子で、その嗣子家綱は、貞綱の子公綱の子息であると『紀井系図』は記す。

規矩高政の乱

建武元年(一三三四)正月、前年暮れより全国各地で北条氏の残党が蜂起しはじめたのに呼応するかの

ように、九州では、前肥後国守護上総掃部助規矩高政が、山鹿・宗像・長野・門司・弓削田・宗・杉・原氏等に護られて、帆柱山城(北九州市八幡西区、標高四八七メートル)に楯籠り、弟の上総左近大夫糸田貞義が筑後の黒木・星野・問註所・横溝氏等に支えられて、堀口城(三池郡)に挙兵した。北条氏は、元寇以来六〇年近くも、豊前の守護職を所持し、国内に所領を広げていたから、豊前の武士をも被官化していたと考えられる。なかでも、門司関や遠賀川河口の麻生庄を押さえ、さらには規矩一郡を所領としたというから、同郡内の国衙領の地頭職を得ていたらしい。高政に加担したという山鹿・門司・長野・武藤吉田氏等は、いわゆる得宗領の地頭代官であったから、探題方として戦ったため、所領没収の憂き目に遭って牢人化していたわけである。他にも、下毛郡大家郷司

藤原久明（菅津又三郎）（『野仲文書』嘉暦三年六月「阿蘇」、京都郡の草美彦三郎入道、企救郡の曾祢弥四郎入道、白桑紀平四郎入道等が、この反乱に同心したと考えられる。

建武元年正月、宗像大宮司は、帆柱山討伐を命ぜられたが、長野政通・貞通兄弟が豊前の兵を率いて裏宗像を支援したため、楯籠った葛岳城を攻め立てられ敗北した。三月上旬、大宰新少貳頼尚が、筑前・肥前の兵二万を率いて豊前へ向かい、大友貞載（貞宗の子）が筑後・豊後の兵一万余を率いて筑後へ向かった。帆柱山城の規矩高政は、少貳勢の猛攻に耐えかねて規矩城に退き、長野政通は降伏した。少貳方は三万の大軍で規矩城を攻め、高政を自殺させた。頼尚はその首をもって上洛した。四月、大友貞載が堀口城を包囲すると、星野・黒木・草野・問註所氏等相次いで降り、十二日、糸田貞義以下の伴類は堀口城で自殺し、菊池武重が糸田城（田川郡糸田町）を攻め落として乱は鎮定した。以上は『歴代鎮西志』の記述であるが、残存史料では、七月二十六日・二十八日の両日に、七月九日の合戦に対する著到状が発せられているのみで、詳しいことはわからない。

盛山の合戦

建武二年正月、越後左近将監入道・上野四郎入道（北条時直の子）らが、長門国府佐加利山城に挙兵したが、正月十二日より十八日までの合戦で城を攻め落とし、生虜にしたと田口孫三郎信連や企救郡吉田庄の武藤吉田孫次郎入道宗智が注進している。この合戦には豊前・肥前の武士が参加している。

豊前守護少貳頼尚

規矩高政の首をもって上洛した少貳貞経は筑前・筑後の守護職を、新少貳頼尚は豊前国守護職を与えられたという。



少貳貞経入道妙恵の花押



少貳頼尚の花押

少貳貞経は、建武三年二月、菊池武敏らに太宰府有智山城を攻められて自殺した。以後、その子頼尚が討ち死にした父

貞経の勲功をも頂戴して、豊前・筑前・肥後等の守護となつたらしい。頼尚は尊氏に随従して、尊氏再上洛の準備について、もっとも奔走努力し、尊氏の海路上洛を献策して、これが採用された『太平記』に見える。入京を果たした尊氏へ、建武三年九月、建武式目十七か条を明石民部大夫行連ら七人と上申した。建武五年に帰国した頼尚は三か国について、尊氏から鎮西管領一色宮内少輔太郎範氏入道道猷へ、軍勢催促を止めさせている。一色道猷は、建武三年四月、尊氏再上洛の時、博多にとどまり留守の大宰府を預かって、九州のことを沙汰していたのである。

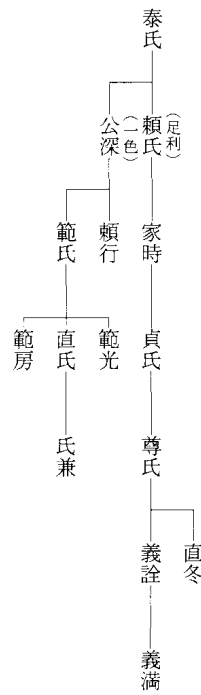
鎮西管領一色道猷

暦応三年（一三四〇）二月、一色道猷は尊氏の執事高師直へ、長文の歎願状を捧げ、九か度も歎願したが、帰洛を許されないからには、鎮西に料所を定め、鎮西管領に預けておくこと、管領分国を定めて、軍勢催促できるようにしてもらいたいと述べ、管領の権限の強化を求めた。これに答えて、康永三年（一三四四）十一月、筑前国志賀島を兵粮料所とし、管領に一〇か所の料所が預けられたが、少貳頼尚は、志賀島の打ち渡しを拒否して探題と対立した。

貞和二年（一三四六）十一月、幕政を担当していた尊氏の弟直義は、島津貞久ら鎮西の守護へ、今後、鎮西のことは一色道猷に任せるから、

共に凶徒退治に当たられよと命じた。大幅な権限を鎮西管領に付与したのである。しかし、尊氏はこの年、一色道猷の子直氏へ、所務争論と地頭御家人の裁判については、子細を調査し報告せよと、権限の一部に制限を加えている。

一色氏略系図



二 鎮西管領足利直冬

足利尊氏の妾腹の子直冬は尊氏の実弟直義の養子となって成長し、貞和五年（二三四九）四月、中国探題となつて、中国地方の南朝方討伐のため備後鞆ノ津へ下向した。しかし、二か月後には、執事高師直のクーデターが起こり、養父直義が一時的に失脚したため、直冬を嫌う高師直は直冬の追伐を命じ、備後へ向かった。直冬は四国へ逃亡したと噂されたが、肥後の河尻氏に迎えられて肥後国に上陸した。この時、（宋木村カカ）附近に住む宇都宮大和太郎左衛門尉（隆房か）が籠城して直冬・詫磨宗直らと戦った。

肥後の守護少貳頼尚は筑前・豊前の守護代に命じて宇都宮城を救援しようとした。

城井城合戦

豊前では、観応元年（一三五〇）五月、南朝方の新田伊達小次郎（貞広か）・如法寺孫次郎入道円康が拳兵し、築城の城井城を包囲したらしい。大蔵一族成恒左衛門三郎種定は築城へ出陣したところ、今度は上毛郡に現れて所々を焼き払ったので、頼尚の守護代西郷兵庫允頼景に従つて、篠塚で戦い、彼の証判を得た。

このころ、新田義氏が馬岳（よ）に拠つたというが、義氏についての史料を確認することはできない。ただし、暦応三年（二三四〇）八月の『長門国御家人三井孫五郎資基軍忠申状』に長門国豊田郷の工藤三郎城の後ろ



馬岳山頂の新田氏表忠碑

巻きとして、先国司日野宰相邦光・新田左馬助義氏・吉見八郎ら大勢が押し寄せたとある（『秋藩閩閩録』所収）。（『三井家文書』）

九州では、この年三月、筑前怡土郡の一貴寺に籠城した新田遠江禅師が、十一月には筑後赤司城に現れている。これより前（建武四年（一三三七）十月）、新田禅師が宇佐郡から上毛郡へ出現している（『編年大友史料』五）。（『栗丸文書』）。観応二年八月ごろ、新田